

文部科学省初等中等教育局委託事業

令和３年度「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」

高等学校通信制課程における、生徒の ICT 活用支援体制の構築

～ICT 活用パーソナルチューター導入による効果の検証～

成果報告書

学校法人野田鎌田学園

あずさ第一高等学校

目次

ページ数

I	はじめに	1
II	事業計画	
1.	調査研究機関等名	
2.	実証研究の名称	
3.	研究対象校	
4.	令和3年度の実証研究の実施期間	
5.	調査研究のテーマを設定するにあたり、社会背景や事業の必要性について	2
6.	調査研究の目的	
7.	調査研究の内容	3
8.	事業の成果と評価の基準となる指標（定性・定量的）	4
9.	調査研究の実施体制	5
III	研究報告	
(1)	令和3年度事業実施日程	
(2)	検討会議について	6
(3)	アンケート調査結果	8
(4)	ICT活用パーソナルチューターの活動について	13
(5)	心理的支援について	15
	調査研究1：模擬オンラインカウンセリングの実施	17
	調査研究2：	
	チューターが、オンラインカウンセリングを行うために必要なこと	19
	調査研究3：カウンセラーが生徒へのオンラインカウンセリングを行う	21
	調査研究4：チューターが生徒へのオンラインカウンセリングを行う	25
	資料：生徒のみなさんへ	30
IV	まとめ・今後の課題、引用参考文献等	31

I はじめに

あずさ第一高等学校は、学校法人野田鎌田学園が平成17年に千葉県認可のもと設置した高等学校で、現在、広域通信制課程として16都道府県を「教育を行う区域」としている。在籍生徒数は、2774名（令和3年5月1日現在）であり、学習するスタイル（通学型や教育連携校在籍等）も多種多様である。

スクールカウンセラーを常勤で6名（公認心理師・臨床心理士）配置しており、さらに本年度からスクールソーシャルワーカー（社会福祉士・精神保健福祉士）を職員組織として位置づけ効果的な運用を始めた。学校の持つ福祉的機能の充実を図ってきた。

コロナ禍において、本年度よりオンライン授業の配信を始めたことや、一人の生徒もICT活用のから取り残されない学校運営に努力するため調査研究に積極的に取り組みこととした。

多様な生徒にICT活用を学校教育の現場に実現する際、生徒の実態と学校の取組に大きな差異が生じる。少し手を差し伸べるだけで生徒の学習が円滑にいくケースを観察することが多く、また、そのタイミングで、きめ細かいフォローがないと自己肯定感の少ない生徒はあきらめてしまう傾向がある。これらの場面を経験し、丁寧な指導の必要性がわかっていても諸般の事情で一步が踏み出せない教員に代わり、「ICT活用パーソナルチューター」配置で改善を試みることを意図した研究である。

「ICT活用パーソナルチューター」が、生徒がどこでつまづき、どう解決できるかのコーディネーターとして機能すればICT活用を真の実のある支援として具体的実践を得ることになる。これらによって、通信制課程に関わる教員の業務が一層明確になり改善につながることを期待している。

本校と同様に、多様性に応じた学び支援を模索中の他校の参考にできれば、また、他校間の相互のフィードバックに活用し、本学園のみならず全国の通信制高等学校の質向上につながれば幸いである。

今年度は、多様な生徒の実態と多様なニーズの把握を生徒向けアンケート等の実施で試みた。また、「ICT活用パーソナルチューター」の育成を兼ね、定着と具体的業務の精査を図った。具体的には、今年度の「ICT活用パーソナルチューター」業務は、通信制の学びの仕組みを良く知っている本校の卒業生4名が中心となり、「心理的支援からサポートできるSCまたはこれに準じる者」の役割について実践段階に入った。効果の検証や、アンケート結果の分析の詳細は、翌年度にまたがってしまうが、生徒支援への効果的な業務内容を、既存の職員に校務分掌の内容として実践し、吸収・還元していく方針である。

Ⅱ 事業計画

1. 調査研究機関等名

学校法人野田鎌田学園

2. 実証研究の名称

高等学校通信制課程における、生徒の ICT 活用支援体制の構築
～ICT 活用パーソナルチューター導入による効果の検証

3. 研究対象校

学校名：あずさ第一高等学校 課程：通信制 学科：普通科

4. 令和3年度の実証研究の実施期間

令和3年10月28日～令和4年3月31日

5. 調査研究のテーマを設定するにあたり、社会背景や事業の必要性について

新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明で予測困難な時代となっているなかで、これからの Society 5.0 時代を見据え、学校教育の質を高めるツールとして先端技術を積極的に取り入れることや ICT 活用についてもフル活用が求められている。

一方、高等学校通信教育の質保証も一層求められつつ、現場では具体的な生徒の実態に即した、取り組みが必要となっている。不登校経験者などが多い生徒層としては、学習面での遅れは否めない中、全ての子供たちの可能性を引き出すために、個別最適な学びや協働的な学びの実現を図っていく必要がある。

高等学校の課程別の入学生数では、全日制・定時制が減少するのとは逆に通信制課程は増加傾向が続いている。通信制課程の使命ともいえる、学ぶ意欲があれば、だれでも、どこでも、いつでも学べる教育機会の提供が求められているためである。

現場の教員の声の一つに、身近にヤングケアラーとなっている生徒の存在があり、彼らの所有するスマートフォンの活用で学習支援を何とかできないものか、という声があった。コロナ禍もあり、本学園のあずさ第一高等学校（通信制）においても本年からオンライン授業の配信も始めた。ただ、いくらハード面やソフト面が充実しても、生徒の学習環境は個々によって、まさに多様に対応するにも厳しいものがある。

校内の情報科の授業内容についても、全生徒に「せめてローマ字入力スキルを」との提言があったばかりである。迫りくる社会の ICT 活用の進展に、卒業後も自信をもって対応できる生徒を育成するためにも、現場では、きめ細かいフォローが必要である。困難な学習環境にいる生徒や、多様な学習環境にいる生徒を教員がきめ細かく適切にかかわることで ICT 活用の効果が生まれるはずである。本事業内容で、従来の業務だけでも多忙な教員に新たな試行錯誤を課すことなく、どのようにするのが多様な学習ニーズを持つ生徒への適切なかわり方を先行研究する意義と必要性がある。

6. 調査研究の目的

(1) 高等学校通信制の教育内容の質向上のため、ICT 活用の積極的活用を図る際、生徒がどのような局面で困難を生じているのかについて事象を取集・分析し把握する。

(2) ICT 活用パーソナルチューター導入により、生徒がオンライン授業等で ICT 活用時に、適切な支援をする。

(3) ICT 活用パーソナルチューター導入により、ICT 活用で学習する生徒に細かく寄り添い、学習状況を把握する。

(4) ICT 活用パーソナルチューター導入により、通信制課程の「学習の励まし」を中心とした支援体制を構築する。

上記の具体的な目的を総合して、新しい教育業務体制としての校務分掌を構築する際の基礎データとする。

本事業終了後には、校務分掌として教員組織に定着する際のパイロット的役割を担い、その後に生かせる先行研究としての成果を得ることを目的とする。

7. 調査研究の内容

・教育課程上の位置づけ

本年度については、現在 1 年次生の一部を対象に教育課程上の普通科の教科科目「国語総合」「世界史」「現代社会」「基礎数学（学校設定科目）」「生物基礎」「コミュニケーション英語Ⅰ」「書道Ⅰ」「体育」をオンラインで配信を始めている。さらに教育連携している高等専修学校に在籍している生徒向けには「科学と人間生活」「保健」「家庭基礎」「英語会話」をオンライン配信している。

・実施場所及び役割分担等

基本的には、あずさ第一高等学校本校他、補習指導施設 7 か所計 8 か所を実施場所とする。さらに本学園の高等専修学校 3 校（野田鎌田学園高等専修学校、野田鎌田学園杉並高等専修学校、野田鎌田学園横浜高等専修学校）には、高等専修学校生徒であるとともにあずさ第一高等学校通信制の生徒として在籍しており、教育連携している。

・調査研究の内容・方法

教科科目に応じて全日型の登校学習をしている 3 校の生徒についても ICT 活用パーソナルチューター導入による効果を調査の対象とする。

・ICT 活用パーソナルチューターの具体的役割について

（最終年度には、生徒が、自分自身の希望によって自分に適した「個別の副担任」として選べる「ICT 活用パーソナルチューター」制度を最終的なイメージとして持ちつつ）

ただし、初年度（令和 3 年度）については、諸種の事情から少人数の実践を検証する。

a. 配信オンライン授業の受講時について、支援を要する内容の把握とその支援業務

- b. 各授業で ICT 活用時の生徒の躰きの把握と支援業務
- c. 主に教員が ICT 活用する際の連携と支援業務
- d. 通信制の特色である、レポートの作成・提出にかかわる進捗状況の確認と支援業務
- e. スクーリング等への出席困難者への ICT 活用による支援業務
- f. 通信制課程では、時間的空間的に、教員と生徒との接点が比較的少ない現状があり、ICT 活用パーソナルチューター存在で、心理的支援等の関係性を深める業務。
- g. ICT 活用により、副担任として、担任業務を補完する業務

本来は、ICT 活用パーソナルチューターに適する職員として

「オンライン授業担当者もしくはカリキュラム全体に詳しい者」

「教科担当やクラス担任のような教職免許保有者」

「情報教育担当者もしくは ICT 活用に詳しい情報技術スキルの所有者」

「心理的支援からサポートできる SC またはこれに準じる者」

と、少なくとも 4 領域の専門性を有する経験者が適していると予想した。

研究初年度や初段階では、これらの領域に詳しい既存の職員がリーダーとして、研究分担し、チーム力が発揮できる体制の根幹として機能するように計画した。今年度の「ICT 活用パーソナルチューター」としては、本事業の人件費から採用できる臨時雇用職員としての非常勤職員での業務分担を計画した。

8. 事業の成果と評価の基準となる指標（定性・定量的）

・ ICT 活用パーソナルチューターの配置効果についての評価方法

評価項目として「ICT 活用パーソナルチューター」を導入して、観点を多角的に設定して行う。具体的な項目として「利便性が上がったか」「安心感を得られたか」「学習への意欲につながったか」などをあげられるが、さらに以下の 2 点を指標として設定する。

（a）成果と評価の基準となる長期的な指標（定量的）について

本校についての、令和 2 年度の中途退学者の事由とその割合の内訳は、学業不振 0%、学校生活・学業不適応 38%、進路変更 26%、病気が死亡 19%、経済的理由 5%、家庭の事情 5%、問題行動等 0%、その他の理由 8%であった（年度当初在籍者数 2652 人のうち中途退学者数 105 人）。このうち、「学校生活・学業不適応」を事由とするもの割合を、事業後と事業前の本校の過去の数値との比較により評価の基準となる指標とする。（ただし、評価の数値が比較できるのが、事業の翌年度となる。）

本校における、平成 26 年度から令和 2 年度までの 7 年間での中退者の退学事由で、「学校生活・学業不適応」を事由とする割合の平均は、35.2%で、この期間、大きな変動はなかったが、本事業により大きく改善に転じる可能性がある。この数値の増減を評価の指標とする根拠として、以下の実践事例がある。

文部科学省から「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」を本学園が受託した令和元・2年度で「SSW支援体制の構築」に取り組んだところ、中途退学者の退学事由のうち経済的理由は、平成26年度から平成30年度までの事業前5年間平均で10.6%であった数値が、事業後2年平均で2.8%（令和元年度0.7%、令和2年度4.8%）と激減し大きな成果を示した。この事由の減少で、全生徒の退学率も事業前7.5%（5年平均）から事業後4.9%（2年平均）と有意な差を示した。

（b）成果と評価の基準となる短期的な指標（定量的・定性的）について

・「生徒」、「保護者」、「ICT活用パーソナルチューター」、「全職員」へのアンケート調査による意識変化の分析（定量的）を行う。

特に、ICT活用パーソナルチューターの導入前と後での意識変化について量的に把握し、具体的な評価項目として、上記に記した項目のほか、さらに「配置されての満足度」、「今後の期待度」、「支援してほしいニーズのある分野・領域」などの数値の変化を成果の評価の基準の指標として扱う。また、積極的に利用に関わった「生徒」、「保護者」及び「ICT活用パーソナルチューター」へは、対面を含めたインタビュー調査で、定性的な評価を得る。

9. 調査研究の実施体制

調査研究実施に対する支援や指導統括管理、経理、事務連絡

学校法人野田鎌田学園本部 法人本部 理事長 長森修三 庶務課長 長森英人

研究統括 本事業に関する検討会議の構成

・研究への助言 江戸川大学 情報教育研究所長 情報文化学科 教授 玉田和恵

・研究対象校の校長 白波瀬正人、副校長 尾崎圭、教頭（研究主担当予定）鈴木進太郎

教頭 巢山克洋、事務長 長森英人

主任SC兼SSW 長森麻記子

情報教育担当者 情報科主任 教諭 大城和宏

オンライン授業担当者代表 教諭 花澤諒一

Ⅲ 研究報告

(1) 令和3年度事業実施日程

表1：実施日程

月	実施内容
10月	(契約締結日～) 事業の趣旨・内容について全職員への周知 雇用職員の採用準備
11月	調査研究の実施体制構築 本事業に関する第1回検討会議(11月18日) ICT活用パーソナルチューター導入、活動開始
12月	ICT活用パーソナルチューターの活動 アンケート調査項目の検討・準備
1月	ICT活用パーソナルチューターの活動 オンラインカウンセリング調査 アンケート調査準備
2月	ICT活用パーソナルチューターの活動 オンラインカウンセリング調査 アンケート調査実施 アンケートの回収と分析 本事業に関する第2回検討会議(2月17日)
3月	ICT活用パーソナルチューターの活動 オンラインカウンセリング調査 調査研究の成果まとめ

(2) 検討会議について

第1回(令和3年11月18日)

①「経緯と実施計画について」主に趣旨説明等

②質疑等

・校内のICT活用について

・パーソナルチューターにはどのような人を採用していくか

→現時点で野田本校卒業生が内定。生徒との距離も近く生徒と教員の間に入りやすい。



写真1：第1回検討会議

- ・コロナによるオンライン授業は多くの学校で導入されたが、本事業の対象は「WEB スタイル」の生徒なのか

→WEB スタイル生徒が入口にはなるが、ICT 教育はスタイルに関わらず取り入れていくので、幅広く対象。通信制高校のスクーリングをオンラインで実施することは認められておらず、最低でも10日間程度のスクーリング登校は必須である。

③意見および情報交換

- ・コロナで登校しない大学生がこのままだとオンラインで授業を受け、オンラインで採用面接を受け、在宅勤務の会社に就職するというように、全く人と関わらないということになるのは心配。社会的課題にもなるのではないか。そういう点でもチューターのような存在には意義があるといえる。
- ・端末を単純に導入してもそれをいかに使うかによって成果には差がでる。教員の ICT 教育に対する意識改革が必要。チューターには機器操作が苦手な教員のフォローも期待したい。
- ・オンライン教育が充実すれば、そこで取り組んだことをスクーリングの一部として認定していくような仕組みもできるのではないか。

④今後の事業について

- ・資料の「事業計画」に基づいて進めていきたい。
- ・「アンケート」について、対象、内容、どこに焦点をあてるかを検討していく。
- ・教育課程、情報教育、情報技術、心理支援の4領域の研究リーダーが中心になる。

第2回令和4年2月17日

①パーソナルチューター活動紹介

- ・非常勤として野田本校で週2回
- ・ICT 活用についてのアンケートを作成、回収、集計（現在進行）

②今年度のスケジュール

③次年度以降の事業方向性について

- ・ICT パーソナルチューターの活動の具体化について



写真2：第2回検討会議

- ・心理的な支援の実践について
- ・アンケートの回収率向上について
- ・校務分掌化についての構想について

④オンラインカウンセリング等による支援について

⑤その他・ICT を活用してキャンパスを横断した部活動等があってもいいのではないか。

- ・オンラインカウンセリング等までを成果物に。

(3) アンケート調査結果

①アンケートの目的

「多様な学習スタイルで通信制課程に在籍する生徒について、どのような情報端末を現在使用し、どのような意識を有しているかの実態を把握する。また、個々の学習への ICT 活用支援を進めるうえで、効果的な支援業務を計画するための基礎的データとする」

②アンケートの対象

あずさ第一高等学校全在籍者数 2 7 7 4 名（令和 3 年 5 月 1 日現在）のうち、2 4 6 3 名（88.8%に当たる）

内訳は、8 キャンパスに所属している 1 6 6 3 名及び、本学園設置の 3 高等専修学校に在籍し、通信制高等学校の卒業を目指す 8 0 0 名（野田鎌田学園高等専修学校 3 8 4 名、野田鎌田学園杉並高等専修学校 2 7 2 名、野田鎌田学園横浜高等専修学校 1 4 4 名）

③実施時期

令和 4 年 1 月 1 4 日から 2 月 2 8 日まで

④実施方法

（別添参考資料のアンケート用紙）調査票を、スクーリングや試験で面接指導施設に登校した際などに配布し、回答後回収する集合調査法により調査した。

⑤回収率

2 4 6 3 名を対象にして、合計では 1 4 7 5 名の回収となり回収率は 59.9%

8 キャンパス所属の生徒については、7 9 2 名の回答（48.0%）

3 高等専修学校所属の生徒については、6 8 3 名の回答（82.0%）

であった。

⑥調査票と回答結果

学年() 所属() スタイル()

ICT 活用についてのアンケート 数字回答数

～はじめに～

ICT とは、主に情報技術を使ったコミュニケーションのことです。今後、パソコンやスマートフォン、WEB を使って「いつでも・どこでも・誰でも」学べる機会を増やしていくために、みなさんが今どのような情報端末機器を身近で使っているのかを調査させていただきます。ご協力をお願いいたします。

1. スマートフォン、タブレット、パソコンのうち、いずれかの情報端末機器を自分または家庭内で所持していますか。 (はい 1468 ・ いいえ 6)

※いいえと答えた方は「3.①」へ。

スマートフォン (自分用 ・ 家庭用 ・ 所持していない)
1390 10 7

タブレット (自分用 ・ 家庭用 ・ 所持していない)
341 323 572

パソコン (自分用 ・ 家庭用 ・ 所持していない)
398 518 379

2. 「1」ではいと答えた方はお答えください。

- ①スマートフォン、タブレット、パソコンこの3つの内でどの端末を最も多く使用しますか。

(スマートフォン 1315 ・ タブレット 37 ・ パソコン 79)

- ②主な使用目的を教えてください。

連絡手段 983 ・ SNS 973 ・ ゲーム 807
学習 233 ・ その他 (122)

- ③Wi-Fiをはじめとした家庭内の通信環境は整っていますか。 (はい ・ いいえ)

1369 37

3. 本学でのWEB授業についてお答えください。

- ① 本学のWEB授業を視聴したことがありますか。 (はい 193・いいえ 303) 1年のみ

- ② これからも視聴していく、または、視聴してみたいですか。(はい 661・いいえ 769)

- ③ ②で答えたその理由を教えてください。

986

パソコンについての質問です。当てはまるものを○で囲ってください。

4. 普段からパソコンを使いますか。

(はい 517 ・ いいえ 945)

※いいえと答えた方は「6」へ。

5. 「4」ではいと答えた方、どの程度パソコンを使えますか。

- ・ローマ字をキーボードを見ながらゆっくり打てる 262
- ・ローマ字をキーボードを見ずに早く打てる 108
- ・ワード、エクセル、パワーポイントを使って資料を作成できる 47
- ・その他 (34)

6. 「4」でいいえと答えた方、その理由はなんですか。

- ・身の回りにパソコンを使える環境がない 253 ・使い方がわからない 147
- ・ローマ字を打つことができない 39 ・その他 376

7. 小学校・中学校では、パソコン等を活用してどのような授業を受けましたか？(複数回答可)

- ・ローマ字入力を勉強した 1250・WEB ページを検索した 911・Word で文章を作成した 638
- ・Excel で計算処理をした 294 ・PowerPoint で発表資料を作成した 571
- ・その他(88)

8. 今後学校でパソコンを使ってみたいですか。 (はい 884 ・ いいえ 546)

①「8」ではいと答えた方、どんなことをしたいですか。

- ・授業で使いたい 603 ・資料作りをしてみたい 330
- ・その他 (96)

②「8」でいいえと答えた方、どんなことが今と変われば使ってみたいですか。

- ・教えてくれる人がいれば使ってみたい 263 ・ローマ字が打てるようになれば使ってみたい 112
- ・その他 (150)

最後の質問です。

9. もし、勉強のことや学校のこと悩んだときにチャットで相談できる相手がいたら活用してみたいですか。 (はい 792 ・ いいえ 653)

アンケートのご協力ありがとうございました。今後の ICT 活用促進に向けて参考にさせていただきます。

文部科学省初等中等教育局委託事業
令和3年度「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」

⑦アンケート結果から

【特徴１：情報端末機器環境】

自分用のパソコンの所持率については、平均 30.7%であった。

但し、詳細な集計によると、対象の集団（あずき第一高等学校の 8 キャンパス所属の生徒の集団と 3 高等専修学校に在籍する生徒の集団）によりグラフのように、6.6%の差がみられる。

図 1： パソコン所持状況（全生徒）

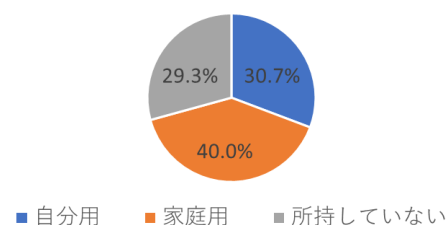


図 2： パソコン所持状況（8 キャンパス）

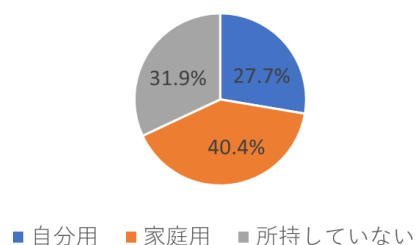
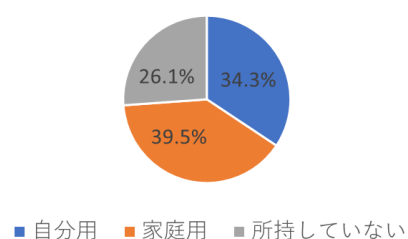


図 3： パソコン所持状況（3 高等専修学校）

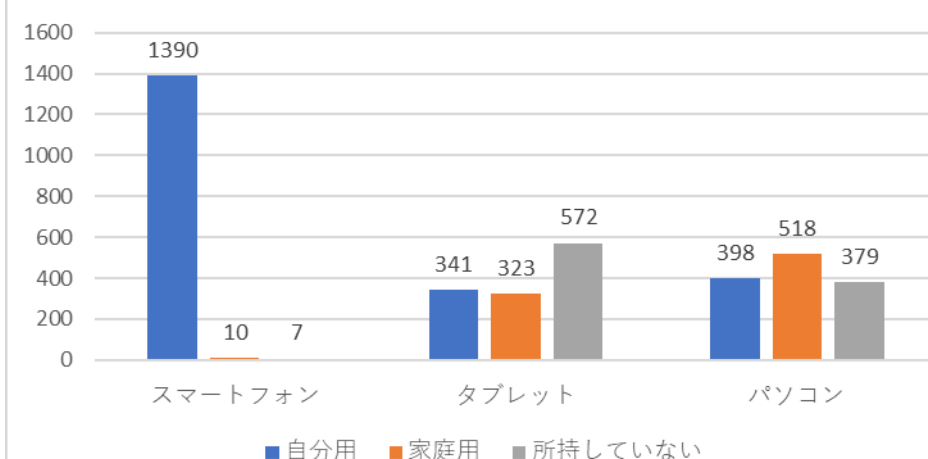


【特徴２：スマートフォン自分用の所持率】

スマートフォンについては、自分用を 94.0%が所持している。

但し、自分用を所持していない 17 名については、少数であるが、今後 ICT 活用の際に一人ひとりに対応できるよう留意が必要である。

図 4： 端末別所持者数



【特徴３：WI-FI 環境】

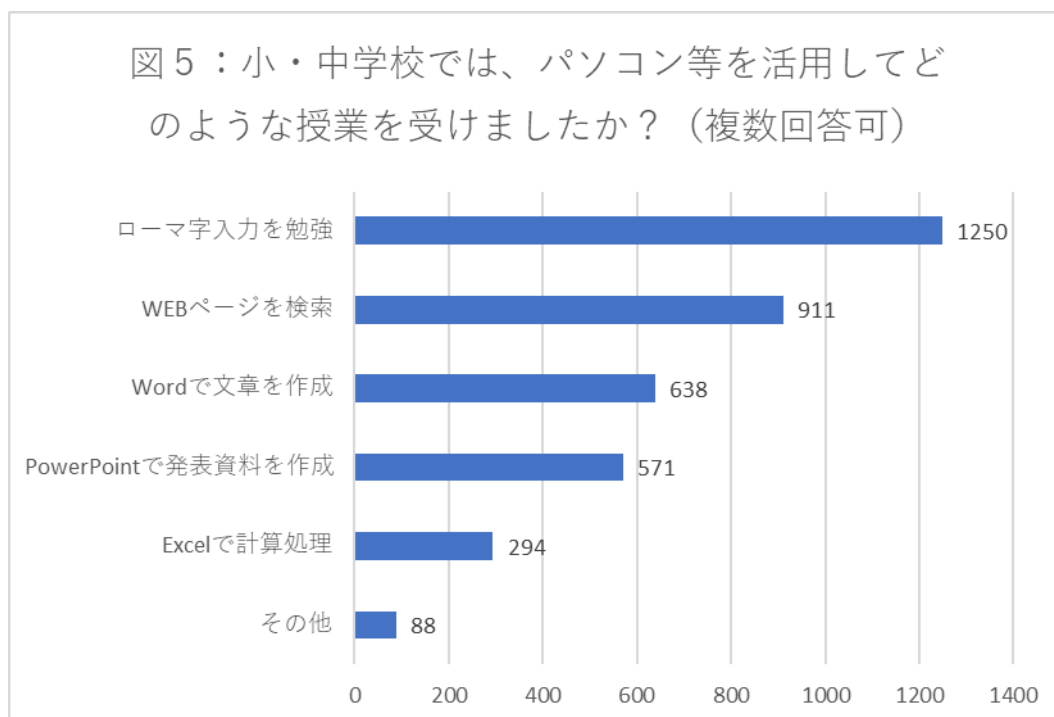
家庭での WI-FI 環境は 97.4%である。

【特徴４：パソコンの使用状況】

「普段からパソコンを使いますか」への回答は、「はい」 35.4%である。

これは、パソコンの所持率とほぼ同様とみられる。

【特徴５：パソコン使用の意欲】



「今後学校でパソコンを使ってみたいですか」への回答は、「はい」が 884 人で 61.8%を示した。

「いいえ」と回答した生徒 546 人のうち、263 人が「教えてくれる人がいれば使ってみたい」と回答し、112 人が「ローマ字が打てるようになれば使ってみたい」と回答している。学習を支援してくれる人の存在で、「はい」への回答者数の増加を見込める。（80%超えとなる）高校生にとって、学校での使用の機会に期待が高いとみられる。

【特徴６：相談方法】

「もし、勉強のことや学校のことで悩んだ時にチャットで相談できる相手がいたら活用してみたいですか」への回答は、「はい」が 54.8%を示した。

（対象の２集団での大きな差異は認められない）

表１：調査票設問９回答者数

	回答合計数（人）	はい	割合%	いいえ	割合%
全体	1445	792	54.8%	653	45.2%
８キャンパス所属	780	423	54.2%	357	45.8%
３高等専修学校所属	665	369	55.5%	296	44.5%

（※今回のアンケートについては、多数の自由記載での回答を得たが、その集計と分析については、時期や紙面の都合もあり、クロス集計等の分析を含め、別の機会の報告とする。）

(4) ICT 活用パーソナルチューターの活動について

今年度（令和3年度）については、短期間で通信制の学習の仕組みに習熟している点で、4名の卒業生を非常勤職員として雇用した。



写真3：ICT 活用パーソナルチューター

①予備的な生徒理解

本委託事業の趣旨の理解を個別に進めた。

今の在校生への理解を深めるために、本委託事業とは別に実施していた学校評価アンケート結果の読解をすすめた。



写真4：野田鎌田学園高等専修学校コンピュータ教室

②実践的な生徒理解

卒業生としての視点を生かし、かつ、実際の授業（特にコンピュータ教室で）を観察する立場にも慣れ、生徒の実態を観察した。

「ICT 活用パーソナルチューター」の趣旨をよく理解して活動してきた。この業務については、卒業生であることの長所を生かし、今年度末に向けて、在校生の「心理的支援」への支援業務を試みた。



写真5：あずさ第一高等学校コンピュータ教室－1



写真 6 :

あずさ第一高等学校コンピュータ教室ー2



写真 7 :

あずさ第一高等学校コンピュータ教室ー3

③直接的な生徒との接触

野田の本校に所属する生徒へ直接話しかけたる機会を作った。

在校生にとって自分の卒業後の進路選択にヒントを得ることにある内容を、それぞれが自己紹介をした。



写真 8 : ICT 活用パーソナルチューターの紹介

④生徒との相互の信頼関係の構築

小グループに分かれ座談会として、直接の面接を交わし、信頼関係を深めることとした。



写真 10 : 座談会ー2



写真 9 : 座談会ー1



写真 11 : 座談会ー3

⑤生徒目線での調査票作成

今回の調査票については、生徒向けアンケートとして、生徒にとってわかりやすく、答えやすい内容になるよう、推敲を重ねた。本事業の非常勤職員（スタッフ）として、用紙の作成、印刷、集計等に積極的に参加した。生徒と年齢層が近いこと等も含めて、教員サイドだけでは気が付かない細かな配慮ある調査票となった。

（５）心理的支援について

ICT 活用パーソナルチューター（以下、チューター）を導入し、「学習の励まし」として心理的支援がどのような形で提供されると望ましいか、仮説検証を行った。

仮説

チューターが、MicroSoftTeams を活用し、オンラインカウンセリングを行うことができれば、「学習の励まし」の機会を多く設けられるのではないか。

先行事例

当校ではオンラインカウンセリング実施経験はないため、従来の対面でのカウンセリングではない方法でカウンセリングを行っている江戸川大学の学生相談室に視察調査を行った。

表 2：先行事例の視察調査報告書

日 時	令和 3 年年 12 月 16 日（木）14：00-16：00
見学先	江戸川大学学生相談室 主任カウンセラー 公認心理師・臨床心理士 日浅美由紀先生 （玉田和恵教授同席）
目 的	電話カウンセリングの現状と課題
報 告	1 現状 コロナ禍になって、利用率が 4 割に減少。それまでは月に 100 件のカウンセリング予約があった。減少した理由はオンライン授業になったら、主訴が「授業に出られない」であった学生の問題が解決してしまったためであった。 現在もオンラインと登校スタイル併用しての授業展開をしているが、玉田教授の授業登録学生が 100 人を超える授業であっても、登校してくる学生が 0 人だったことも。オンラインで授業を受けている学生ばかり。 今は、2 年生の相談が多い。友だちがいなくて、ウツになったという相談が多い。辞めたいという相談も多い。オンラインがなくなると学生は出てこないと思う。友だちはできないままという状態がこれからも続くだろう。大学側もコロナが終わっても、オンライン授業は継続していくものと思われる。 2 電話カウンセリング 元々は Web 会議ツールを使ってオンラインカウンセリングを実施しようとした。でも顔を出すことに抵抗を感じる学生ばかりで、電話カウンセリングを実施することになった。電話カウンセリングは完全予約制。それ以外は突然電話がかかってきて、予約がなかったとしても、そのまま電話カウンセリングをしない（∴枠組みの重視）。 【メリット】家から出られない人にとっては大切。 【デメリット】聞き取りにくい、何回も聞き返せない。 家で安心して話せない子は外出先で電話してくる。 定期券を買っていないので、電車賃かかるくらいなら電話で、となっている。 3 電話口で自殺未遂を起こす可能性への対処 電話口で自殺未遂を起こす可能性がある、マニュアルを作っているが、カウンセリングを深めないようにもしている。自殺を思い浮かべないよう配慮。カウンセリングの目的をストレスへの対処としている。最初の契約で「身体症状が出てきた時は医療を紹介する」「保護者に連絡する」ということを明記してカウンセリング契約を結んでいる。「今から自殺しようとしている」という電話は予約がなくても対応し、電話を切らせない中で保護者や警察に連絡している。

この視察調査で、従来の対面カウンセリングと異なる点として、【メリット：家から出られない人にとっては大切】【デメリット：聞き取りにくい、何回も聞き返せない】が聴取された。そして自殺未遂を起こす可能性への対処として、カウンセリングの目的を、対面カウンセリングでは「自己理解を深めるということ」を主軸にしていたが、対面ではないカウンセリングでは「ストレスへの対処」とし、自殺未遂へのリスク回避を行うことが重要。また事前の同意書への記入で、自傷他害の行動が見られた時はどのような対応をするか事前に生徒とカウンセラーが共有しておくことの必要性を学ぶことができた。

上記を受けて、当校では、下記の同意書を作成するに至った。

表3：オンラインカウンセリング（Teams）についての説明と同意書

オンラインカウンセリング（Teams）についての説明と同意書	
学 校 法 人 野 田 鎌 田 学 園	
オンラインカウンセリング（Teams）での面接は1回30分とします。その他、対面カウンセリングと違って様々な課題があり、利用する生徒本人、保護者の皆様にもお願いしたい事項があります。下記の留意事項を確認し、同意いただける場合は、□にチェックし、同意書に署名をお願いします。ご不明な点は遠慮なさらずにカウンセラーにご質問ください。	
記	
留意事項 ☐ オンラインカウンセリングは対面カウンセリングと異なり、面接は1回30分とします。その他、同等のものを提供できない場合があります。 ☐ オンラインカウンセリングでは、自宅Wi-fiの利用を推奨します。ネット環境によっては、通信料がかかる場合があります。通信料金体系を確認し、想定外の料金請求がないことを確認してください。 ☐ Teamsはセキュリティが完全とは言えない部分もあり、情報漏えいなどのリスクがあります。そのため、不特定多数の者が利用可能な公衆無線LANの使用は控えてください。できる限り、プライバシーが守れる、安全で適切な環境で利用してください。 ☐ オンラインカウンセリングの録画、録音、撮影は許可を得てください。 ☐ 本人以外の人を同席させる場合も許可を得てください。カウンセラー側も同席はしません。 ☐ Teamsの技術的な問題により、カウンセリングが中断、遅延することがあります。接続ができない場合は、カウンセラーから下記の電話番号に電話をかけます。 ☐ カウンセラーがオンラインカウンセリングを適切でないと判断した際には、他の方法（電話等）に変更したり、本人の同意を得た上で、適切な他の機関を紹介したりする場合があります。 ☐ 自傷他害を起こす可能性が高いと、カウンセラーが判断した場合は、家族・他の教職員・警察等に連絡する場合があります。 ☐ 予約時間にあらかじめTeamsを立ち上げておいてください。接続ができない場合は、電話やメールで連絡を取ることができます。予約時間から10分経っても連絡がつかない場合は、オンラインカウンセリングの予約はキャンセルになります。	
以上	
同 意 書	
上記の説明を読んで、全ての留意事項について承諾しました。	
署名年月日：令和4年 月 日	
生 徒 氏 名：	電 話：
保護者氏名：	

調査研究 1：模擬オンラインカウンセリングの実施

目 的

チューターが、当校カウンセラーによる模擬オンラインカウンセリングを受け、上記同意書の有効性について確認するとともに、本校でのオンラインカウンセリング導入において問題点がないか検討した。

方 法

日 時：令和 4 年 1 月 2 7 日（木） 1 3：3 0～1 5：0 0

方 法：模擬オンラインカウンセリングの実施者は、本研究の心理的支援の研究リーダーであるカウンセラー 1 人が行った。模擬オンラインカウンセリングを受けたチューターは 3 人。1 人 3 0 分間の模擬オンラインカウンセリングを実施した。実施場所は、カウンセラーは学園内の野田鎌田学園杉並高等専修学校のカウンセリング室、チューターは当校 PC 室で、両室をオンラインでつないで実施した。模擬オンラインカウンセリング終了後は、下記のアンケートに記入にしてもらった。

表 4：アンケート模擬オンラインカウンセリングを受けて

アンケート：模擬オンラインカウンセリングを受けて	
実施日	2022 年 1 月 27 日 木曜日
実施時間	13:30-14:00 14:00-14:30 14:30-15:00
チューターの基本データ	
【性別：女性】【年齢： 才】【過去にカウンセリングを受けたこと：有・無】	
感 想	
1	模擬オンラインカウンセリングを受けての満足度（選択回答） 1 とても満足 2 満足 3 どちらでもない 4 不満足 5 とても不満足
2	上記 1 の回答理由（自由回答）
3	模擬オンラインカウンセリングを受けた感想をお願いします。対面カウンセリングを受けたことがあれば、その時と比較してください。（自由回答）
4	オンラインカウンセリングは以下のデメリットがあるとされています。今回の模擬オンラインカウンセリングではいかがだったでしょうか。気になった項目に○をしてください。（選択回答） 1 感情が読み取りにくい 2 オーバーリアクションが必要（顔く回数、視線を合わせるが多い等） 3 自分の顔が見える（どう映っているか気になる） 4 画面を見ていなければならない 5 疲れる 6 タイムラグがある 7 通信が途切れる
5	上記 4 の回答理由（自由回答）
6	他、気になった点があれば記入をお願いします。可能でしたら改善案とその理由も併せて教えてください。（自由回答）

以上です。ご協力ありがとうございます。

写真 12：模擬オンラインカウンセリング



写真 13：Teams ビデオ通話（イメージ）



事前準備：

- ①オンラインカウンセリング（Teams）の説明と同意書を略式稟議にかけ、実施校の管理職（校長、副校長、教頭）に了承を得た。
- ②チューターに模擬オンラインカウンセリング実施目的として、「問題点を見つけるため、実際にオンラインカウンセリングを実施して感想を聞かせて欲しい」と伝え、了承を得た。
- ③模擬オンラインカウンセリングの前に、カウンセリングを受ける側のチューター3人に印刷したオンラインカウンセリング（Teams）の説明と同意書やアンケートに目を通してもらった。
- ④チューターには模擬オンラインカウンセリングが始まる時間までに、Teams を立ち上げておいてもらった。

模擬オンラインカウンセリング30分間実施の流れ：

- ①カウンセラーとチューターは挨拶程度しか交わしたことがなく、Teams やメールといったオンラインツールで連絡を取り合うことはあっても、模擬オンラインカウンセリングでは初めて顔を合わせるなどの関係性であった。そのため導入時は自己紹介や共通の話題で関係性構築に務めた。
- ②オンラインカウンセリング（Teams）の説明と同意書を実際に読み合わせて確認し、チューターにオンラインカウンセリングを受ける側として気になる点はないかを聴取した。
- ③主訴について聴取。模擬オンラインカウンセリング中、カウンセラーは、自己理解を深めることよりもストレスへの対処を目的にカウンセリングを行った。5分前にはカウンセリング内容の振り返りを行った。
- ④アンケートへの協力を求めた。

結 果

アンケート結果については巻末参照。チューター3人の意見としては、「自分がどう映っているか気になってしまったり、タイムラグで被ってしゃべってしまったりしたことがあるが、慣れることで改善できる部分が大きいだろう。このようなデメリットよりも、思っている以上にスムーズに話をすることができ、話を聴いてもらうことで温かい気持ちになれたためオンラインカウンセリングのメリットの方が大きいように思った」という意見であった。

考 察

当校では今までオンラインカウンセリングを実施したことがなかった。手探りの状態ではあるが、作成したオンラインカウンセリング（Teams）説明と同意書をもとに、1回30分間であれば、オンラインカウンセリングのデメリットであると言われている、感情が読み取りにくい、オーバーリアクションが必要だったり自分がどう映っているか気になったりするための疲れ、タイムラグがある等の支障は、オンラインカウンセリングを受ける側も慣れれば、「学習の励まし」という支援の機会を得られると考えられた。

調査研究2：チューターが、オンラインカウンセリングを行うために必要なこと

目 的

チューターが生徒に対してオンラインカウンセリングを実施する際に、必要となってくるものを洗い出す。

方 法

日 時：令和4年2月8日（火）10：40～11：20

方 法：本研究の心理的支援の研究リーダーであるカウンセラー1人がチューター3人にインタビューを行った。インタビューは録音し、逐語に起こした。

写真 14：インタビュー



結 果

チューターが生徒に対してオンラインカウンセリングを実施する際に、必要となってくるものとしては、聴くスキルが挙げられた。まず、しゃべりやすい雰囲気を出す方法がわからない。そして話の聴き方。友だち同士ではないから、チューター自身が良いと思ったことであっても、生徒にそれを伝えるタイミングかどうか検討しなければいけない。また沈黙してしまった場合は、しゃべらなきゃいけないと焦ってしまうと思うし、どのような対応をすればいいのか等の知識が欲しい、とのことであった。

他には、「オンラインカウンセリングを行うためのPC」「生徒がスマホやPCがなく、学校でオンラインカウンセリングを行うための個室部屋」「PC入力するときに役に立つローマ字表の作成」が必要となってくるのではないかと話になった。そして、オンラインカウンセリングを充実させるに「自己紹介の機会」も挙げられていた。チューター自身が生徒だった時のことを思い出し、どうしたら話したいと思える先生になるかを考えていた。そして、まずはチューターがどんな人なのかを知ってもらい、チューターと話してみたいと思える場面を作ってもらい。そのことで、チューターをより身近に感じて、こんなの私だけかも…と思うような引け目を感じることで、相談意欲をあげることができるのではないかと話していた。

考 察

今回、調査に協力してくれたチューター3人は、直近の模擬オンラインカウンセリングを受けた経験を持っていた。自身がオンラインカウンセリングを行う側になったときも、カウンセリングを受けたことがないチューターよりもイメージがしやすかったと考える。当校は、高校入学以前に不登校であったり、学校不適応感を感じていたりする生徒が多く在籍している。その生徒の中の1人であったチューターでもあるので、話したい、聴いてもらいたいと思ったことでも、実際に来談に至るまでの難しさもイメージしやすかったようだ。当校はあずさ第一高等学校の本科生だけでも8キャンパスにまたがっている。また学校法人野田鎌田学園のグループ校を含めると11か所にもなる。その中でチューター活動を充実させるには、チューターが話していたように、手紙などの広報活動も必要であるが、実際に会ったからこその伝えられるものもあるだろう。しかし11か所となると、昼休みや放課後に気軽に話せるような関係性になるほどに生徒たちとの対面交流の時間を増やしていくには、チューターの人数の充足を求めなければならず、他に何か良い方法はないかと思案せざるをえない。

調査研究3：カウンセラーが生徒へのオンラインカウンセリングを行う

目 的

調査研究1と2を基に、カウンセラーが生徒にオンラインカウンセリングを実施して、オンラインカウンセリングを本施行に際してメリットとデメリットを洗い出す。

方 法

実施期間：令和4年2月下旬～3月上旬

方 法：本研究の心理的支援の研究リーダーであるカウンセラーが、高校3年生の生徒を対象にオンラインカウンセリングを実施した。生徒には事前に研究に参加してほしいと説明を行い、研究への協力を個別に依頼した。参加協力した生徒は女子生徒2人。ともに今回のカウンセラーによる対面カウンセリングを受けた経験がある。生徒は自宅から、カウンセラーが学校から、Teams を利用して実施した。各30分ずつ、計2回のオンラインカウンセリングを受けた後、半構造化面接でオンラインカウンセリングと対面カウンセリングを比較してもらった。また調査研究2で挙げられた相談意欲を挙げる方法についての意見を聴取した。

オンラインカウンセリング実施後インタビュー内容：

- ① オンラインカウンセリングを受けた感想
- ② 対面カウンセリングとオンラインカウンセリングを比べて感じたこと
- ③ オンラインカウンセリングを受けたいと思えるために、あると良いと思うこと

結 果

オンラインカウンセリングは2人の高校3年生に実施した。実施した日時については以下の通り。実施後のインタビュー結果は表6に記した。

表5：オンラインカウンセリング開催の日時

	生徒 A	生徒 B
1 回目	令和4年2月22日（火） 14：00－14：30	令和4年3月3日（木） 14：00－14：30
2 回目	令和4年3月1日（火） 15：30－16：00	令和4年3月10日（木） 14：40－15：10

写真 15:Teams ビデオ通話カメラオン



写真 16:Teams ビデオ通話カメラオン

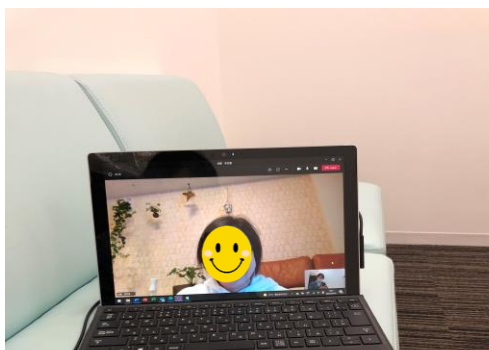


写真 17:Teams ビデオ通話カメラオフ



表 6：オンラインカウンセリング実施後インタビュー

感想【オンラインカウンセリング1回目を終えて】	
生徒 A	タイムラグは気にならなかった。自分の顔もカメラオフにすれば気になることはない。疲れるなどのカウンセラーが話したデメリットは全く感じなかった。それよりも、時間があっという間に過ぎた印象。良いこともあった。カメラオフにしたのもあって、電話感覚だった。家で、自分の部屋で話せたので、リラックスできた。制服で話さないで良いというところもよかった。ビデオオフはいいなと思った。オンラインカウンセリングのメリットを感じた。
生徒 B	今日はカメラオンでやってみた。時間が長いように感じた。でもいいと思う。学校に行かなくても、先生と、電話じゃなくて話せる感じ。これからもこういうの、あった方がいいと思います。
感想【オンラインカウンセリング2回目を終えて】	
生徒 A	カメラをオフしたので話はしやすかった。ただタイムラグがあって話がかぶってしまうところは気になった。自分のカメラがオフになっているので、そこは仕方ないと思う。話がかぶってしまったから、何か話したくなくなる、ということとはなかった。自分から話したいことがあったら「話したい」というタイプだからかもしれない。カウンセラーとは前から話しているからかもしれない。
生徒 B	今日はカメラオフでやってみた。時間は同じように長く感じた。カメラオンとオフでの違いはなかったように思った。目が合うと話しづらいと思う人がいるなとは思った。カメラオン、オフ両方とも。 今日は自由登校日だったから学校はお休みの日で、買い物してごはんを食べたらカウンセリングの約束のことを忘れてしまった。
【オンラインカウンセリングを受けたいと思えるために、あると良いと思うこと】	
生徒 A	家から出なくてもカウンセラーと話せるということはいいことだと思った。ただ家だと、誰かに聞かれてしまう可能性も考えられるので、メリットデメリットある。対面カウンセリングに行くまでの代替だと思えば十分かなと思った。
生徒 B	学校の HP とかに、オンラインカウンセリングの紹介動画を載せるといいと思う。どんな人なのかかわかったら、話したくなると思う。 チャットは PC を使っているか、スマホを使っているかで違ってくると思う。スマホだったらチャットやり易いけど、PC ならカメラオフでオンラインカウンセリングの方がいいなと思う。

考 察

生徒 A と生徒 B に共通して得られた感想として「ビデオ通話時にはカメラオンではない方が良い」というものであった。生徒自身の顔が映ってしまうことで「なんだか気になってしまう」と言う理由から「時間が長く感じた」との感想もあった。「視線が合うと話しづらい人もいると思う」との感想もあった。しかしこのような中でも「オンラインカウンセリングはいいと思う」と、対面カウンセリングの代替ツールとして有効ではないかという意見が生徒 A、B に共通して聴取できた。

また当校でオンラインカウンセリングを行う際のメリットとしては、「学校に行かなくても、学校の先生とは会える」という点である。登校しないで良い通信制高等学校には大きなメリットであると言える。家でリラックスした状態で、制服を着なくても、学校の先生と繋がる機会を持てることは、十分に学習意欲を刺激することが可能であると考えた。カウンセラーによるオンラインカウンセリングは十分に「学習の励まし」として機能できることが認められた。

一方、デメリットとしては、ビデオオフにしてしまうと、カウンセラー側がオンラインカウンセリングに慣れていないこともあり、話が被ってしまうということが何回かあった。このことで、今回の生徒たちは「相談したいことがあったら、話が被ってしまうことで、話しくなくなることはないけど、カウンセラーと話している機会が少ない生徒だったら、ありうるかもしれない」と回答してくれた。もし今後、オンラインカウンセリングを実施することになれば、カメラオフを生徒から求められると思うので、話が被らないようにする方法を見出す必要があると感じた。

またカウンセラー側の問題として、今までの対面カウンセリングは休み時間のチャイムが鳴ってからとか、生徒が約束の時間に来てくれたりとかで、予約の管理をしていた。しかしオンラインカウンセリングになると、出勤している場所以外で在籍している生徒の予約も入れることができるのもあり、予約管理が煩雑になる可能性が考えられた。カウンセラー側で働き方や予約への意識の仕方を変える必要があると考えた。そして今回、生徒側も予約を忘れてしまうことがあった。対面カウンセリングだと、何時に家を出て学校に向かってと 1 日のスケジュールを立てるが、オンラインカウンセリングだと、場所を選ばないというメリットもあるため、「時間になったら話そう」と思うと、予定を失念しやすい可能性も考えられた。

以上のことから、オンラインカウンセリングを行うメリットは「学習の励まし」には十分に機能すると考えた。しかしデメリットをカバーするための対応策を今後検討する必要性は

認められた。加えて、カウンセラーが行うオンラインカウンセリングであっても、対面カウンセリングの代替であるということも確認できた。カウンセリング内容を深めることはリスクが高く、行えないので、オンラインカウンセリングではカバーできない部分もあった。他にも、生徒としてはカメラオフの方が話しやすいかもしれず、そうするとカウンセラー側が今まで対面カウンセリングだと得られていた表情やしぐさなどの情報が少なくなってしまう。そのためカウンセラーが今まで気づけていたことが気づけない可能性も高まる。今後、カウンセラーがオンラインカウンセリングを導入するとなれば、生徒側はメリットを感じているため、需要は見込まれる。カウンセラーとしては、さらなる検討、スキル向上が求められると考えた。

調査研究 4：チューターが生徒へのオンラインカウンセリングを行う

目 的

調査研究 1、2、3 を基に、チューターがオンラインカウンセリングを実施して、オンラインカウンセリングを本施行に際してメリットとデメリットを洗い出す。

方 法

事前準備①②を経て、座談会で出会った生徒に研究の主旨を説明し、協力の同意を得られた生徒に対して、チューターがオンラインカウンセリングを実施した。また実施後にチューターが半構造化面接を行った。

① 事前準備 1

目 的：チューターがオンラインカウンセリングを生徒に行うにあたっての不安を具体的に聴取した。

方 法：

実施日

令和 4 年 2 月 2 4 日（木） 9：00－9：30

場 所

Teams ビデオ通話を通じて、チューターは野田本校、カウンセラーは野田鎌田学園横浜高等専修学校にてそれぞれ話した。チューター側の参加者は 3 人。調査研究 1、2 で参加したチューター A、B、C であった。

写真 18：調査研究 4 事前準備 1



結 果：

チューターからは、「話が途切れてしまったらどうしたらいいか」「相談が始まってしまったらどうしたらいいか」「どんな距離感で話せるといいか」などと具体的な質問が出た。カウンセラーは自身の経験を基にどのような対応が望ましいかチューターとともに考え、具体的に回答した。またチューターから「オンラインカウンセリングが聞こえる場所で待機し、終わった後に良かった点や改善すると良い点について教えてもらえると自身の成長につながる」と要望があったので、快諾した。他、Microsoft Teams のアプリのダウンロードや、家に Wi-fi がなかった場合の対応についても質問が出たので、カウンセラーから検討会議のメンバーに対応を依頼した。

② 事前準備 2

3月3日に開催されたチューターと生徒の座談会に参加した生徒に、本研究への参加者を募った。研究協力を募集した際は、チラシ（巻末資料参照）を作成し、協力を仰いだ。

結 果 ・ 考 察

チューターが生徒にオンラインカウンセリングを行う約束は、3人の生徒とすることができたが、うち2人は「当日に用事ができた」という理由でキャンセルになった。1人とは無事にオンラインカウンセリングを行うことができた。その生徒を生徒 C とした。生徒 C がチューターのオンラインカウンセリングを受けた実施日時は、下表 7 の通り。

表 7：チューターが行った生徒 C へのオンラインカウンセリングの実施日時

実施日時	参加生徒	対応チューター
令和 4 年 3 月 8 日（火） 14：10－14：40	生徒 C	チューター A

今回は生徒の代表として、生徒 C が研究に参加してくれた。オンラインカウンセリングを実施する前からの状況、実施中、実施後の状況を以下に記す。

<実施前>

当初の予約は 13：30～であったが、スムーズにはいかず、上記の時間から開始となった。その理由としては以下のことが考えられる。オンラインカウンセリングを行う約束をした 3 月 3 日に Microsoft Teams の使用説明やアプリをダウンロードしやすくするための QR コードを載せた保護者宛の書面を渡していた。保護者宛の書面を生徒本人に渡していたが、渡してから 1 週間弱経ってもアプリのダウンロードはなかった。ダウンロードができるかどうかは、事務で把握できるシステムになっていたので確認できた。オンラインカウンセリ

グ開始時間になってもダウンロードができていなかったのを確認できたため、キャンパス長に連絡を取ってもらうことにした。しかし生徒 C 本人が帰宅できなかったこと、変更後の携帯電話の番号を聞いていなかったことで、生徒 C が今、ダウンロードが必要なことに気づいているか、ダウンロードができなくて困っているか等、どのような状況に置かれているのかがわかっていなかった（実際には生徒 C「接続に時間がかかった。ハイフンをアンダーバーと勘違いした。」とうまくダウンロードができなかった理由を教えてくれた）。

そのため、今回の教職員とチューターの反省として、

- ・心理支援担当リーダーは、事務が生徒 C がダウンロードできたか確認していなかった
- ・チューターは、生徒 C に「ダウンロードできた？」と確認できればよかった
- ・事務は、チューター等にダウンロードができていないことを伝えていなかった
- ・教員は、学校でダウンロードをするのを補助すればよかった

とそれぞれ改善できるだろう点を見つけることができた。

つまり“確認”という連携が教職員の間でできたら、開始時間になって慌てることにはならなかったのかもしれない。初めてのことを学校に導入する際は、改めて、教職員間、教職員と生徒間での確認の必要性を感じた。

<実施中>

オンラインカウンセリングは、チューター A が生徒 C に行った。何かあったときのサポートとして、画面に映らないが会話が聞こえる位置にカウンセラーも待機した。

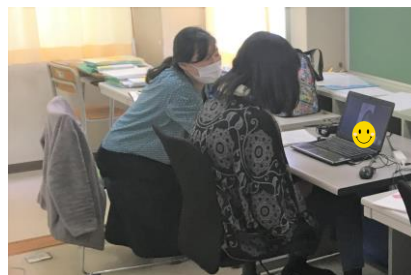
実施中はとても和やかに時間が過ぎていった。

生徒 C は非常に協力的であり、チューター A も話すことが好きで積極的にオンラインカウンセリングを行ってくれた。

会話は途切れることがなく、チューター A が生徒 C を丁寧に親身に、思いやりの気持ちをもって対応し、生徒 C もそれに応えてくれたように感じた。

途中、チューター側の音声聞き取りづらくなってしまうことがあり、待機していたカウンセラーがサポートに入ることはあったが、チューター A もすぐに音声途切れがちになってしまったことを生徒 C に伝えて、こちらの状況を知ってもらう努力をした点も良かったと考えた。オンラインでつながっている状況だからこそ、伝えないと伝わらない部分があることも確認できた。

写真 20：途中で音声途切れ
サポートしているところ



<実施後>

実施後、チューターAから生徒Cに「オンラインカウンセリングを受けた感想」「オンラインカウンセリングのデメリットとしてタイムラグやビデオオンしていると自分が映ってしまうのが気になる、ということもあるのだが、どう感じたか？」と半構造化面接を行った。

以下、生徒Cの回答を記す。

●生徒Cの回答

今日の感想としては、面白かった。また機会があるならば、利用したい。私自身は話す方よりも聴く方が得意。でも愚痴を聞いてもらえるとスッキリする。でも先生（チューター）が疲れちゃわないか心配。30分は短かった。途切れたりもなく、話しづらさはなかった。タイムラグも気にならなかった。私は、顔を見て話すのは抵抗がないが、Lineのように文字でのやり取りの方がやり取りしやすい生徒もいるかもしれないと思った。選択肢があったらいいと思う。Teamsで顔を見ながら話すとか、Teamsチャットでやり取りするとか、選べるといいだろう。段階を踏んで、最初は会って話して、オンラインカウンセリングにするか、チャットで話してオンラインカウンセリングにするかなどができるといかもしれない。中には、ビデオオンにしていた方が話しやすくなるという生徒もいると思う。

生徒Cに退出ボタンを押してもらって完全に終了した後、チューターAに感想を求めた。

●チューターAの感想

最初は何を話せたらいいだろうと思っていたけど、生徒が話してくれる生徒だったし、色々な事に興味を持ってくれる生徒だった。好きなことを話してくれるのでやりやすかった。次どんな生徒になるかわからないが、話を聞けるようになればいいなと思った。生徒目線の意見ももらえた。チューター側のPCの問題で回線が途切れることがあったが、改善の必要性を感じた。

以上のことから、チューターによるオンラインカウンセリングは「学習の励まし」として有効であると考えられた。しかし、チューターに安心してオンラインカウンセリングを実施してもらうためには、ハード面ではPCなどの環境整備は必要であり、またソフト面ではカウンセリングの技術サポートの必要性を感じた。

心理的支援のまとめ

チューターが、Microsoft Teams を活用し、オンラインカウンセリングを行えば、「学習の励まし」の機会を多く設けられると言えた。

現在、当校には常勤のカウンセラーが6人配置されており、心理的支援は非常に充実していると言える。しかしそれは登校してきている生徒を中心とした心理的支援という、ある意味、限定された心理的支援であった。そのため、当校に通えなくなってしまったが自宅にいる生徒には、今までは事務連絡のために自宅に電話をかけ、そのついでにカウンセラーが電話をかわり、様子を聴取していた。電話カウンセリングも実施できていなかった。そのため今回の研究の仮説を検証するためには、まずはカウンセラーが電話カウンセリングやオンラインカウンセリングの安全性を確認する必要がある。その上でチューターがオンラインカウンセリングを行い、メリットとデメリットを検討して、実際に導入可能かを検証する必要がある。研究協力を依頼する生徒は、健康的な精神を持つと判断した生徒に限定した。このこともあって、カウンセラーやチューターが実施したオンラインカウンセリングは安全に実施することができ、生徒は学校をより身近に感じることができ、一定の効果を得られたと考える。

今後チューターによるオンラインカウンセリングを導入する際は、上述したようなデメリットへの対応策を検討してから実施することが望ましい。また、今回のオンラインカウンセリングは30分間としたが、その時間設定も30分以内とするのも良いかもしれない。より安全に実施するための対策を検討したい。

以上のことから、学校に対して苦手意識を持っていた生徒にも、オンラインカウンセリングは敷居低くサポートにつなげやすい可能性を見いだせた。そしてチューターがオンラインカウンセリングという方法で生徒介入を行うと、カウンセラーがカウンセリングを行うよりもっと敷居を低くすることができ、生徒の満足度も十分に確認することができた。しかし敷居が低いために、誰にも言えなかった悩みをチューターに吐露する可能性も考えられる。チューターで対応できるものであれば良いが、対応苦慮する場合はカウンセラーにすぐにつなげられる体制を整え、チューターとカウンセラー、教員の連携を十分に行う必要性を感じた。より安全に行うために、さらなる策を講じることが求められると考えた。

生徒のみなさんへ



研究協力者募集

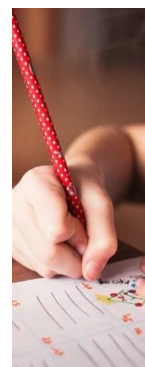
オンラインカウンセリング



こんにちは。
カウンセラーの長森と申します。

現在、あずさ第一高等学校は、文部科学省から委託を受けて
「多様性に応じた新時代の学びの充実支援事業」の研究をしています。

そこでは、どうやったら生徒のみなさんが、ICT（情報通信技術）を活用できる
か、「学校生活を楽しもう」「勉強したい」という気持ちになれるかを、先生たち
で考えています。



今回は、チューター（あずさ第一高等学校の卒業生）とオンラインでおしゃべりしたり質問したりす
ることで、「この学校でがんばりたいな」「ちゃんと卒業したいな」という気持ちをサポートできるの
ではないかと考えてみました。

研究協力してくださる生徒のみなさんには、実際にチューターとおしゃべりや質問をしてもらい、
どんな気持ちになるのかをお聞きしたいと思います。

ぜひぜひ、積極的なご協力をお願いいたします<(_)>



約束の日時

3月8日（火） **～30分間程度**

※生徒のみなさんには、Teams というアプリを使って、おうちからスマホやパソコンでチューターと
おしゃべりをしてもらいたいと思っています。

※Teams の設定については QR コードの載っている用紙を参照ください。

※約束の時間までに Teams を立ち上げて、サインインしておいてください。

わからないことがあったら、遠慮なさらず質問ください。どうぞよろしくお願いいたします。

心理支援研究リーダー：カウンセラー長森麻記子

野田本校 TEL04-7122-2400

IV まとめ・今後の課題

ICT 活用パーソナルチューターの活動については、今回の研究で、心理的支援の機能を果たすことで、一つの効果が期待できることが分かった。

学校に対して苦手意識を持っていた生徒にも、オンラインカウンセリングを用いることで、サポートにつなげやすい可能性を見いだせた。生徒の満足度も十分に確認することができた。今後はカウンセラーにすぐにつなげられる体制を整えることや、教員の連携を十分に行う必要性に注意しつつ、安全に行う策を講じることについて研究を深めたい。

ICT 活用パーソナルチューターの支援分野については、他の分野から現職の教員に期待できる部分も多く、次年度以降については、早期に校務分掌での位置づけ進め、他の分野も含めて実証研究していきたい。

本研究を進めるにあたり、江戸川大学玉田和恵教授には、様々な的確なアドバイスをいただき、試行錯誤の多い中、将来への方針をご教示いただきました。深謝申し上げます。

引用参考文献

- ・加藤のぞみ,三重県臨床心理士会.感染拡大下での臨床心理相談体験に基づく継続支援の工夫について.臨床心理士報 vol.33 No.1 2022,1,25-41
- ・河野俊寛日本における読み書き障がいのある子どもへの ICT を活用した支援の現状と課題.LD 研究,第 30 巻第 4 号 2021,11,283-287
- ・山川裕樹,一般社団法人京都府臨床心理士会.コロナ禍における学生相談機関とその連携に関する研究,臨床心理士報 vol.33 No.1 2022,1,42-54

文部科学省初等中等教育局委託事業

令和 3 年度「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」

高等学校通信制課程における、生徒の ICT 活用支援体制の構築

～ICT 活用パーソナルチューター導入による効果の検証～

成果報告書

(編集・発行者)

学校法人野田鎌田学園 あずさ第一高等学校

〒278-0037

千葉県野田市野田 405-1

電話 04-7122-2400

FAX 04-7125-8115